

関東における農村構造の変質と文政改革：主として武州多摩郡日野宿組合を中心に

著者	柳田 和久
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	30
ページ	58-77
発行年	1978-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/10256

関東における農村構造の変質と文政改革

——主として武州多摩郡日野宿組合を中心に——

柳 田 和 久

はじめに

文政一〇年、幕府は関東八ヶ国の村々に四四ヶ条の触書を発し、文政改革を行なうのであるが、その触書の内、特に注目されるものに組合村の編成がある。この「改革組合村」の編成は、関東特有の複雑に入組錯綜した知行形態を廃し、近隣の村々を天領・私領の領主の異同に関係なく組合せて編成した処に大きな特色がある。そして「改革組合村」は約四五ヶ村を目安に編成し、これを大組合とし、さらに大組合を幾つかの小組合に分け、大組合・小組合よりそれぞれ数名の大惣代・小惣代を選出して、大組合・小組合の運営にあたらせたのである。さらに「改革組合村」の内より特に「大高之取締宜村見立親村と相定、諸勘定其外万端引受取計」として、そこを寄場とし、「改革組合村」で懸る諸費用の割振りや、触書・廻状などの伝達の迅速化を計ったのである。

「改革組合村」の研究は、早く明治四五年に諸井六郎氏の『徳川時代之武蔵本庄』に記されたのを始めとして、森安彦氏・大石

慎三郎氏⁽³⁾・北島正元氏⁽⁴⁾・川村優氏⁽⁵⁾・煎本増夫氏⁽⁶⁾・長谷川伸三氏⁽⁷⁾・山中清孝氏⁽⁸⁾によって研究が進められている。この「改革組合村」に関する評価を大別すると次のようになる。

④ 警察的・治安維持とする評価——諸井六郎・大石慎三郎氏

⑤ 警察的な治安強化、商業統制、若者対策と封建意識の再建、村内訴訟の処理とする評価——森安彦・北島正元・煎本増夫・山中清孝氏

⑥ 「改革組合村」に対する評価は基本的に④説と同じであるが、文政一〇年以前にすでに組合村編成が見られるとする評価——川村優・長谷川伸三氏

⑦ ④の説のうち、大石氏の場合は天領・私領が複雑に入組み、治安維持機構に欠陥のある関東に、幕府は文化二年に関東取締出役、文政一〇年に「改革組合村」を編成して、治安維持を始め諸種の取締を行ったとするものである。また⑤の説のうち、森氏は、無宿・悪党の警察的な取締りとともに、文政一〇年・同一二年の農間余業調査に注目され、警察的、治安的取締とともに、在

方商人・農間渡世人の調査・職人の手間賃の規制など経済統制を指摘している。⑥の説のうち川村氏は、上・下総国を例として、宝暦・天明頃に組合村の編成が見られ、悪党の横行に対して、治安の不備を補強せんとして「改革組合村」編成以前に組合村が編成されているとしている。

以上の様に、多くの研究があり、それについての評価も別れているが、「改革組合村」の編成方法、大・小惣代の選出、「改革組合村」が村内で果たした役割などは、いまだに明確になっているとはいえない。

本稿では、先学の研究を念頭に置きながら、武州多摩郡日野宿組合を中心に考察を加えてみることにしたい。

一 「改革組合村」の編成

文政一〇年八月一五日、関東取締出役吉田左五郎より、日野宿へ四六ヶ村の呼出しの達しがあった。そして翌二六日には吉田左五郎が八王子宿より日野宿佐藤彦右衛門宅に着、夕刻に四六ヶ村の者を呼寄せて改革の趣を申渡し、組合村の編成、村々議定書の作成、大・小惣代の選出などが行なわれたのである。やがて九月二四日に第1表の四七ヶ村の古田畑、新田畑が組合に編入され、日野宿組合が編成されたのである。⁽⁹⁾これによると寄場役人は日野宿名主準太・彦右衛門が勤め、大惣代は設置時には大組合行事と呼んでいたが、連光寺村の名主忠右衛門・柴崎村名主次郎兵衛が勤めている。さらに日野宿組合を八小組合に分け、各小組合より一名宛それぞれ表中の名主が小惣代を勤めている。

関東における農村構造の変質と文政改革（柳田）

「改革組合村」の編成方法を、まず郡・領の行政機構について見ると、武蔵国では八七組合村の内、四郡より編成しているのは、保土谷宿組合・本庄宿組合の二組合であり、三郡より編成されているのは八組合、二郡よりなるのは二九組合、一郡よりなるのは四八組合で、二郡以上より編成している組合村は四四・八%と約半数近くを占めている。日野宿組合村は、多摩一郡より編成されているが、さらに領別に見ると、日野領一七ヶ村・柚木領一二ヶ村・拜島領六ヶ村・小宮領六ヶ村・由井領二ヶ村の五領よりなっている。「改革組合村」編成は、郡・領の行政機構によったものではない。また、助郷組合と比べると、慶長一〇年に大久保長安により日野町と定められ、人馬継立を行なうが、貞享元年には日野宿となり、この時三七ヶ村が助郷村に定められている。⁽¹⁰⁾日野宿組合の内、助郷村でないのは、平村、日野新田、程久保村、貝取村、上・下柚木村の六ヶ村である。さらに文政七年九月には、助郷村々に早・水損が続いたため、加助郷を願うのであるが、この時惣代となった村が、柴崎・郷地・中神・上田・越野・中野・落合・連光寺・関戸の九ヶ村である。⁽¹¹⁾この助郷惣代村々の内文政一〇年に、大・小惣代になる村は六ヶ村である。また、文政四年には連光寺村など二ヶ村の浪人取締組合が編成された。この組合行司は豊田村・上和田村である。⁽¹²⁾この二ヶ村は大・小惣代になっていない。二ヶ村の取締組合は、そのままだ日野宿組合に移行したのではなく、助郷組合・助郷惣代を利用して編成されたのである。また、郷地村名主を小惣代とする六ヶ村小組合は、日野宿と玉川を隔てて向側にある。それが日野宿組合に編成されたの

〔第1表〕

日野宿組合編成表

大組合	小組合	村名	領主の相給形態			村高	家数
			代官	旗本	寺社		
寄場 日野宿 寄場役人 名主 隼太 同 彦右衛門	小惣代 上田村 名主 忠藏	日野宿村	1			石 2304,721	軒 427
		野田井村	1			156,392	14
		新井村	1			148,017	31
		願寺村	1			107,673	25
		下田村		1		151,422	25
		上宮村	1			146,812	11
		川辺堀之内村	1	1		118,227	23
			1	1		172,864	36
	同 栗須村 名主 忠左衛門	豊田村	1	1		369,174	72
		石川村	1	4		876.9	120
		栗須村	1	1		309,985	79
		平日野新田	1	1		43. 23,737	13 4
大組合惣代 連光寺村 名主 忠右衛門 柴崎村 名主 次郎兵衛	同 郷地村 名主 七五郎	柴崎村	1	1	1	1139,339	239
		崎地村	1	1		115,568	29
		郷地村	1	1		268,598	36
		福島村	1	2		442,701	71
		福中宮村	1	2		475,571	95
			1	2		471.69	41
	同 平村 名主 浅右衛門	山幡村	1	3		460.82	58
		平幡村		1	1	271,043	74
		高沢村		1	1	193.3	30
		三程久保村		1	1	267,498	47
		落川村		2		50,235	21
		上下落川村		2		375.32	27
	同 下落合村 名主 伝次郎	和百落乞	1	2	1	366,986	40
		上落乞		2		300.	44
		草合田村		1		412,661	35
	同 関戸村 名主 篤次郎	連光寺村	1	1	1	358,973	60
		関戸宮村	1	1		272,658	76
		方取村		4		512,039	60
		中川原村		2		378,388	36
			1	1		62,939	14
	同 別所村 名主 藤七	大塚之内村	1	2		143,946	37
		堀之野村		1		117,777	28
				2		398,211	68
				1		148.12	
	同 松木村 名主 市郎左衛門	越野村		1		604,276	75
		松大沢村		1		384,564	53
		上柚木村		2		178,298	38
		下柚木村		1		277,021	40
				2		381.	51
				2		412.4	76
				3		399,124	72

〔大組合・小組合・村名の欄は（文政10年「御取締御改革用留」富沢家文書）より、他は（天保11年）「武蔵国多摩郡日野宿組合村高帳」横浜市緑区千草台吉浜俊家文書）より作成。〕

は、日野宿助郷村々と同時に、日野宿と柴崎村が渡船場であった事にもよる。

また、文政一〇年九月一七日に関戸村・貝取村・一ノ宮村・寺方村・中川原村・連光寺村の六ヶ村が、関戸村の林蔵宅において小組合寄合を開いたのであるが、各村々が集まる前に中川原村名主只右衛門が関戸村に来て、「玉川と跨組合不都合ニ付組被致候」と申して帰ったため、残り五ヶ村で寄合を開いている。さらに文政一一年八月にも「玉川と隔組合者都合悪敷候ニ付相離れ度」として、小組合編成に難色を示している。このため関東取締出役の差図を受ける事になり、結局、関戸村小組合に編入されるのである。この様に中川原村は玉川の向側にあり交通上不便なため難色を示しているのであるが、それにもかかわらず小組合に編入されているのは、一ノ宮村と中川原村とは渡場であった事によるのである。このように組合村編成は単に地理的便宜だけでなく、助郷組合や渡船場などの行政的関係が多分に考慮されている。そして明治の大小区制編成によって、日野地域は神奈川県第三二区に編入され、中川原・柴崎・郷地・福島・築地・中神・宮沢の七ヶ村が第三二区を除かれるまで、日野宿組合村は新たな行政機構となるのである。

次に大・小惣代の選出について見ると、大・小惣代は「身元宜敷もの、冥加のため組合内取締方致し候趣意」と、⁽¹⁵⁾身元宜敷ものを選び組合内の取締りを行わせている。そして、その選出について森氏は在郷商人としての性格を重視しており、⁽¹⁶⁾山中氏は「組合村の寄合は豪農商層の階層的結集の場」と指摘している。⁽¹⁷⁾しかし

関東における農村構造の変質と文政改革（柳田）

「改革組合村」編成時には、豪農商層の階層的結集の場として編成したのではなく、村役人の内より選出する事によって、村役人の権限強化を計ったのである。大・小惣代の選出を見ると「本文村々諸勘定、其外は年番にて引受ケ取計候様に御座候」と、⁽¹⁸⁾諸費用の勘定は定番である寄場役人が行ない、それ以外の取締りは年番で行っている。すなわち大・小惣代は基本的には年番であったのである。日野宿組合では設置時には八小組合に別れ、寄場役人二名、大惣代二名、小惣代八名で、いずれも名主を勤める者である。そして、次の史料は文久二年頃の加筆と思われるが、⁽¹⁹⁾それまで小惣代五名は年番で勤めている。

小惣代定番取極

一、当組合小惣代多分年番持ニ而万端不都合ニ付、大惣代忠右衛門役入願之節、千住宿ニ而吉田様江願書并人撰名前相添差出置、追而最寄御廻村之御御呼出御取極方相願置候得共可相成候、小組合限り示談之上取極候様申談、文久二戊年正月廿九日高幡山惣集会之節、一組式人江相定隔年勤、非番ニ候得共当番不動之節者代勤候様取極候事、

但、是迄定番三組も已来惣式人ツ、与相立候事、

これによると文久二年まで小惣代三名は定番で勤め、五名は年番で勤めていたのである。しかし年番ではかえって不都合であるため、以後小惣代を定番とし、しかも一小組合二名宛の合計一六名の小惣代を選出して隔年で勤めるよう定めている。さらに元治元年には、小惣代が一六名では多人数であり、しかも隔年番で勤めるのではかえって不取締りになるとして、第2表の様に一小組

〔第2表〕 大惣代・小惣代の所持高表

役名	村名	名前	役主名 就任の年	大惣代 小惣代 就任の年	所持高	農間余業	家族
大惣代	連光寺村	忠右衛門			40石余		8
"	柴崎村	次郎兵衛		文久元年	35石余	水車渡世	11
小惣代	郷地村	兵蔵	安政3年	安政6	25石余	質渡世	6
"	栗須村	忠左衛門	"2	"6	42石余	農業一統	8
"	関戸村	惣兵衛	"3	文久2	12石余	"	6
"	堀之内村	与之助	"2	"	50石余	質渡世	10
"	松木村	市郎左衛門	"3	"	30石余	"	12
"	程久保村	弥兵衛					
"	落合村	久兵衛		文久2年	12石余	質荒物渡世	
"	石田村	真次郎	嘉永5年	"	30石余	農業一統	11

（文久元年「大惣代願連印書付」、元治元年「惣代之者奉願上候書付」）
（元治元年「小惣代定役御届書付」より作成、空欄は記載なし、富沢家文書）

合一名宛とし、定役としていのである。その間、寄場役人・大惣代は替らないが、小惣代は年番―隔年番―定番と変化しているのである。しかも人選された者はいずれも名主である。さらに第2表より大・小惣代の所持高を見ると、大惣代忠右衛門は四〇石余を保有し、次郎兵衛は三五石余、他に水車渡世を行っている。小惣代は最高が堀之内村の与之助が五〇石余で質渡世を行い、次が忠左衛門の四二石余で、最低は惣兵衛・久兵衛の一三石余である。大・小惣代に選出された者は所持高が多く農間余業として水車渡世・質渡世を行っている者で、村内でも上層農民で大部分が村役人である。宝暦頃よりの村役人の新旧交替を含めて、大・小惣代の選出は村役人として、特に名主としての性格が強かったのである。そして村内内部・村間の矛盾激化に対応して、勘定奉行・関東取締出役の下に大・小惣代を新たに置き、名主の中でも有力な者を大・小惣代に選出する事により、村役人を統轄して組合村内の取締強化を計ったのである。

次に組合村内の取締りについてであるが、文政改革の触書は前文四ヶ条、後文四〇ヶ条からなる長文のものである。触書の主要点を整理すると、次の様になる。

①無宿・悪党・博徒の取締りと、その改心帰農

②農村・農民の取締り

③村入用・諸費用の節約軽減化

④強訴・徒党・騒動の取締り

⑤若者組・歌舞伎芝居・相撲などの風俗取締り

⑥農間余業、職人手間代の取締り

にまとめることができる。そしてこれらの取締りを勘定奉行の下に、「改革組合村」を編成して統一行的に行っている。

二 無宿・悪党・博徒の取締り

文政一年八月一六日に、寺方村より連光寺村へ廻文が継来たのである。その内容は、八月一日昼九ツ時、中山道本庄宿地内御堂坂において、佐渡へ送る囚人九人が通りかかった処、無宿六人が長脇差を抜き、鎧を携、目籠三挺を切破り、中瀬村無宿松五郎、大藏無宿藤次郎を連れて逃去したのである。そのため本庄宿や近辺村々より人足を出して追駈けたが行方がわからなくなり、秩父郡下吉田村に居る関東取締出役河野啓介・太田平助に訴出した。そして、吉田左五郎・小池幸助より、日野宿組合村に小仏・案下口、秩父口の御固の急御用状が来たのである。そして、一八日に秩父より小仏の固々に出ている。⁽²¹⁾この様に「改革組合村」の編成は、無宿・悪党・博徒の取締りを主要な目的にしている。それは、関東特有の複雑に錯綜した知行形態のため、博徒・無宿の取締りが十分でなく、その欠陥を「改革組合村」を編成して十分な成果をあげようとしたのであり、その事はすでに先学によって指摘されている。また「改革組合村」編成以前に上総・下総では無宿・悪党の横行に対処するため、宝曆・天明頃より組合村を編成して取締りが行なわれている事が明らかにされている。⁽²²⁾このような例は、武州那賀郡の村々でも見る事ができる。⁽²³⁾

御勘定奉行え

武州那賀之内村々え、近年浪人体之もの参、合力を乞、ねたり

関東における農村構造の変質と文政改革（柳田）

ケ間敷儀申者数多有之候間、右駄之もの召捕候へ、直ニ訴之、路用雜用は組合高割ニ致度旨（後略）

これによると、明和五年十一月の触書に、浪人や、ゆすり者に対し、組合村を編成して取締りを行ない、その費用を組合村の高割で負担している。また年代は下るが、文政四年に早魃にあったため、連光寺村・関戸村など二ヶ村が組合村を編成して、諸勸化・浪人の取締りを議定している。⁽²⁴⁾

議定一札之事

近年浪人駄之者或者諸勸化多々有之、別而当年者早魃ニ而在一統困窮弥相増候ニ付、今般式拾壹村申合浪人駄之者止宿相断、合力之義ハ宍村限四文ツ、外不差出、其余押弥□いたし、万一及狼籍候ハ者見付次第近辺之者相互ニ駆付其所ニ捕置、年番行司立無詰いたし、夫々組合江致通達御差出願等ニも相成候ハ者、右雜用之義ハ出府中飯料・小遣共宍人銀四匁懸リニ極、其余諸掛リ之義ハ情々檢約いたし明細帳ニ記置、組合惣高ニ割合無滞出金いたし差支無之様可仕候、（後略）

これによると、浪人などが多数徘徊して、諸勸化などが多くなり、そのため、二ヶ村が組合村を編成して、浪人の宿泊禁止、合力銭は四文、狼籍の場合は近辺の者が召捕え、それを奉行所へ差出す場合の費用は組合村の総高割で負担する事、などを議定している。

この様に、すでに文政一〇年以前に、関東各地に組合村の編成が見られるのであるが、甲州・信州などと異って、関東全域に組合村が編成されたのではなく、農村の自衛組織として地域によつ

て編成された所と、編成されなかつた地域があつたものと思われる。そして組合村を編成されなかつた地域は、鷹場組合などを利用して取締りを行ない、また一村で取締り、また相給村は領主との組合で取締りを行っているのである。

また無宿・博徒の横行は甲州でも多く見られるのであるが、天明三年八月には組合村で定書を作成して取締りを行っている。

組合村々相談定書

一、御免又者御添触も無之諸勸化并出所不知浪人者、先達而御支配様達御聞^{（25）}被下置候ニ付、組合村相談之上定書取究有之候処、近年等閑相成候村々も有之候ニ付、尚又相談之上定書仕候所左之通

一、御免勸化 高百石ニ付鑑式拾四文

一、御添触勸化 高百石ニ付鑑拾貳文

一、御免勸化之寺社行 候節止宿願候者、尋之上末錢米代請取之宿可致候、其外出家社人浪人修行者たりとも決而宿等仕間鋪候事、

一、近年田畑不作打続百姓困窮仕罷有候所ニ、新規之諸勸化多分有之品々諸勸化等之内ニ者、本寺触頭之添触有之由申之、出所不知出家社人山伏行人其外物費ニ至迄組合村々入込、合力之儀弥たりケ間敷申掛迷惑仕候、此上右躰之儀者勿論止宿并先々江継送人足等相願候とも、先規仕来たりとも決而承届間敷候

附り送り座頭之儀近郷中合決而請取申間敷候、無拠訳有之候者村継計可仕候

（中略）

右者此度組合村々相談之上相究候上者、前書之趣弥堅ク相守可申候、尤此上諸勸化浪人戸無僧其外不依何者理不尽成儀出来候者、組合村々打寄相談之上取計可申候、右ニ付諸掛り等有之節ハ組合村々高割ニ可仕候、若相談之趣不埒之村方も有之候者組合村打寄急度相糺可申候、如斯相定候上者少も違背仕間敷候、為後證相談定書村々連印、仍而如件、

天明三年卯八月

塩部村

湯村

羽黒村

（以下一六ヶ村略）

これによると、天明の飢饉により、村・農民が困窮をきたし、諸勸化・浪人・出家・社人・山伏・行人などが増加し、村々へ入込み「ねたりケ間敷申掛」、合力錢・諸勸化錢を乞村々へ寄生しているのである。そのため、諸勸化錢の規制、止宿の禁止、継送人足の禁止などを議定している。これらの村々は山梨郡北山筋の一九ヶ村である。山梨郡北山筋には、他に西青沼・上飯田・竹日向・塔岩・高成・川窪・古府中の七ヶ村がある。この七ヶ村の村々は田安領であり領主が異なるため組合村に編入されていないのである。代官支配の一ヶ村の村々が郡中割によって組合村を編成して浪人・無宿の取締りを行っている。郡中割の成立時期は明確ではないが、早い時期から成立し諸種の取締りを行っている。

また信州中之条天領においても、郡中割による組合村編成が行

なわれ、代官の下に郡中惣代・組惣代が置かれている。郡中惣代は組惣代・村名主を統轄して、廻状・御用状類の差立、年貢金の保管、年貢米の江戸輸送、治安維持などを行っている。⁽²⁸⁾それが可能であったのは甲州・信州など代官の一給支配の村々が多かったためである。関東では正徳三年の大庄屋制の廃止以来、享保一九年に再設置を触れるのであるが、複雑に入組錯綜した知行形態のため再設置は困難で、そのため無宿・博徒の取締りは農村の自衛組織によったのである。

文政一〇年、幕府は関東の村々に「改革組合村」を編成して、勘定奉行、関東取締出役の下に置き、幕府の統一的支配のもとに無宿・博徒の取締りを行なうのであるが、その編成は次のようである。⁽²⁹⁾

一、前書無宿并無頼之者差押候節、多分入用不_レ相懸ため組合相定、兼て組合有_レ之分は、一同以来都て悪者召捕り、諸失費総高割に可_レ致旨被_レ仰渡_二候に付ては、是迄組合有_レ之村々は其儘差置、組合無_レ之所は凡四十五ヶ村目当に致し為_二組合_一、尤土地之遠近村高之多少等別も有_レ之候へ共、先づ右等之儀目当に致し、是迄組合有_レ之場所にても、村数纔之処は自分入用多分相成難儀にも候筋に候間、組合為_二相増_一、

(後略)

これによると無宿・無頼の取締りの費用を「改革組合村」の総高割で負担することによって、その費用の軽減を計ったのである。そして、文政一〇年以前に組合村が編成されている所は、そのまま編成を認め、編成されていない所は新たに四五ヶ村目当に編

関東における農村構造の変質と文政改革（柳田）

成したのである。また齧合村数が少ない所は、村数を増して編成を行ない費用の軽減を計ったのである。そのため文政四年に編成された連光寺村などの二ヶ村組合は、日野宿四六ヶ村組合に、再編成されたのである。

文政一〇年以前の組合村は、凶作・旱魃によって増加する諸勸化・浪人などの寄生から防止する事にあつたのであるが、「改革組合村」は、「併元来関内の無宿ども悉く可_レ召捕_二御趣意にも無_レ之、改心帰農為_レ致候教諭第一の儀にて」と、無宿を全て逮捕するのではなく、改心帰農を計る事が第一の目的であつた。この点、次の様にある。⁽³⁰⁾

一、無宿無頼のものども御廻村先にて御召捕、又村方にて同様差押差出し、御糺の上無宿有宿とも、無罪の者は得と御教諭改心帰農可_レ致旨御見込のものは、慥成引受人御撰御引渡被_レ成候間、無宿の分は其所支配御地頭へ村方より相届、若身上立直不_レ申候は直に取押可_レ申旨御沙汰に付兼て申合置候事、

これによると、関東取締出役・「改革組合村」による逮捕は、改心帰農を目的としている。改心帰農の見込みのある者は慥なる引受人へ引渡し、また無宿の者は村方より、その領主へ引渡ししているのである。そして、改心帰農の見込のない者は改めて領主・奉行所へ差出したのである。

天保四年には、各寄場に囲補理場が設けられ、そこに囚人・無宿を預け、各囲補理場を転々たらい廻しにして教諭を加えたのである。しかし、その事によって「改革組合村」の経済的負担を

増大させ、かえって不取締りにしたのである。そのため熊谷宿では弘化二年に次の様な議定書を作成している。⁽³²⁾

為取替議定書之事

囚人御調中并寄場御預ケ被 仰付候節、囚人屯人ニ付番人足三人ツ、村々々高割を以順番ニ差出勤来候処、場所ニ寄候而者、御加役方囚人多分ニ相嵩村々難義いたし、毎度取逃候儀茂有之候ニ付、自然囚人と訓合取逃候哉ニ被思召、今般改而御仕法替被仰渡候ニ付、寄場役人大小惣代一同打寄得与申談之上、左ニ議定いたし置候(後略)

これによると、経済的負担の過重のため囚人を逃す事が度々起っている。そのため経済的負担の経減化を計るのである。その内容は、①囲補理場は熊谷宿庄右衛門の土蔵を借り、代金一ヶ年に五両宛支払う、②定番人は庄右衛門を上番人に、他に二名下番人を置き、給料一ヶ年に五両宛とする。③囚人の飯料を一飯四〇文として、一ヶ年約一〇両とする。④圍外囲錠鍵は庄右衛門、中囲錠鍵は寄場役人が預る。⑤囚人を大勢入れない、⑥囚人病氣の時は早く医師に見せ、費用は組合より出金する、⑦囚人の取逃・異変が起った場合は、大小惣代へ通達して、番人を召連れ出役に子細を話す。奉行所へ差出す場合は、一人につき一日銀五匁づつとする、などを議定している。そして天保二三年より弘化元年までの三年間の費用が一二六兩余、一年平均にして四二兩も懸り、其外雑費が一年に四八兩懸っているのである。そこで弘化三年には、土蔵の借代金五兩、番人給料一五兩、囚人飯料一〇兩で、これらの合計三〇兩で済むと定めたのである。しかし、元治二年の

「囚人出入覚帳」によると、一年間に熊谷宿に預けられた囚人は三七五人で、その費用が七三兩余も懸り、その外雑費を加えると九一兩余にのぼっている。この様に囲補理場の設置によって、経済的負担が増大し、囚人を取逃す事が度々起り、かえって不取締りにしたのである。

三 農村・農民の取締り

文政改革が農村・農民に対して、如何なる役割を果たしたのかを考えるために、次に連光寺村についてみることにしよう。

連光寺村は多摩丘陵の北方に位置し、府中と町田の間にある村で、天保一四年の「村明細帳」によると、田方一六町一反四畝一步、畑方二八町一五歩、村高二七・二石余の畑方の多い農村で、家数は八二軒、その内二一人が農間余業者である。生産物は稲・麦・粟・稗・蕎麦・大豆を主とし、農間稼として、男は薪取・炭焼、女は木綿糸取などを行なっている。領主は家康入部より寛永一〇年まで天領で、以後明治に至るまで旗本天野氏の一給支配の村である。天野氏は他に武州多摩郡坂浜村、上州邑楽郡海老瀬村、下総国葛飾郡桐ヶ谷村を知行する八一〇石の旗本である。⁽³³⁾

第3表は人口と出奉公人を表にしたものである。⁽³⁴⁾ 連光寺村の人口は元文三年(穢多の人数含む)、延享元年に最高の人数を示しているが、宝暦・明和・寛政と減少し、文化七年には最低を示している。それが文政五年より増加し始め、明治に至るまで増加の一途をたどっている。出奉公人は、元文三年には九六人、延享元年には一〇一人と増加しているが、宝暦になると急激に減少し、

〔第3表〕 連光寺村人口・出奉公人数表

年 号	人 口			出 奉 公 人		
	人 口	男	女	人数	男	女
元文3年	632	320	312	96	49	47
延享元	533	273	260	101	55	46
宝暦12	447	236	211	47	23	24
明和5	416	219	197	12	7	5
寛政4	417 (92)	223 (50)	194 (42)	21	13	8
〃 10	411 (106)	212 (55)	199 (51)	23	9	14
文化元	411 (106)	219 (53)	192 (53)	42	24	18
〃 7	403 (112)	220 (63)	183 (49)	25	11	14
〃 13	418 (119)	221 (72)	197 (47)	26	9	17
文政5	435 (123)	220 (75)	215 (48)	2	0	2
天保5	436	221	215	30	3 (8)	9 (10)
〃 11	443	223	220	32	15	17
弘化3	482	250	232	0	0	0
元治元	466	234	232	0	0	0
明治3	505	246	259	0	0	0

(元文3～明治3 「人別帳并宗門人別改帳」より作成 富沢家文書)

降、特に開港にもなって養蚕が栄えとなり、人口増加となって現われたのであろう。

第4表は、農民層分解を階層別に表にしたものである。⁽³⁷⁾元禄六年には全体の人数が八一名で、三五石以上が一名、一〇〇三石層が三六名、三〇〇石層が四四名と、村内上層農民一名(富沢家)と、多数の下層農民が際立っている。宝暦四年には全体の人数が一〇名減少している。そして、一〇〇三石層が減少しているに對し、三〇〇石層の貧農層が増加している。寛政四年には、さらに貧農層の増加が見られ、それが天保一四年まではほぼ同じ状態が続くのである。そして、この時期の特色は、慶長検地以来、代々名主を世襲して来た富沢本家が、しだいに石高を減少させているに對し、富沢分家は延宝三年に田畑屋敷約一町歩を与えられて分家して以来、元禄六年には九石余、宝暦四年に二二石余、天明五年には本村に二三石余、枝郷下川原に一二石余の合計三五石余と土地集積を行ない、⁽³⁸⁾村内では富沢本家に次ぐ土地保有者に成長している事である。その一方枝郷下川原では、寛政一〇年に家数三〇軒の内、三軒の潰百姓が出現し、一一軒は「屋敷并畑方而已少々所持仕、田方一向無之候ニ付、家別役相動不申候」と、⁽³⁹⁾田畑が少なく諸役が動まらない状態であった。さらに、天保九年には連光寺村で八軒、枝郷下川原で三軒、技郷諏訪坂で一軒の合計一二軒の潰百姓が出現し、⁽⁴⁰⁾離村者・貧農層が増加しているのである。安政六年以降は再び農民層分解が進み、万延元年には全体の人口が減少し、また五石以下層の減少と貧農層が村内に滞留できない程分解が急激に進み、そ

〔第4表〕 連光寺村階層表

保有高	元禄6年	宝暦4	寛政4	文化8	文政元	天保14	安政6	万延元	明治元	明治5
35石以上	1									2
30以上35未満		1					2	2	2	
25 ～ 30			1	1	1	1				
20 ～ 25		1	1	1	1	1				
15 ～ 20										
10 ～ 15										2
5 ～ 10	9	4	7	7	7	7	8	9	8	10
3 ～ 5	27	14	11	15	15	16	15	12	14	16
0 ～ 3	44	51	77	73	74	74	70	66	70	70
合 計	81	71	97	97	98	99	95	89	94	100

（元禄6年「惣百姓名寄石高帳」寛政4、文化8、文政元「田畑屋敷石高改帳」天保14、安政6「田畑屋敷石高帳」宝暦4「名寄帳」万延元「田畑屋敷石高改帳」明治元「武蔵国多摩郡連光寺村石高帳」明治5「田畑屋敷石高帳」より作成 富沢家文書）

の一方、富沢本家・分家とも土地集積を行っている。そして明治三年には、富沢本家は村内に四二石九斗余所持しているのに対し、分家は村内に四〇石、他村に九二石余の合計一三二石余を有し、⁽⁴⁾本家をしのぐ有力百姓に成長しているのである。

以上の様な明和頃よりの農民層分解の進行は農村構造の質的变化をもたらした。寛政一〇年に、連光寺百姓七〇人が、惣左衛門・庄左衛門・枝郷馬引沢の利左衛門・同下川原の弥五左衛門の四人を惣代に立て、名主である富沢本家と組頭を相手取って訴訟を起した。訴訟側の惣左衛門は富沢分家である。訴訟文書は一〇ヶ条から成る長文のものであるが、これを要約すると、①相談山林立木売代金の押領、②祝儀御用金の押領、③新伝馬代金・下川原田方永代金・鋤伝馬代金の押領、④小前鯉縁組への名主の干渉、⑤名主遣銭の増銭、⑥下川原の御用船手桶持人足の助合願を等閑にしている、⑦下川原の橋掛出銭の助合願を等閑にしている、⑧下川原・馬引沢の郷藏普請を本村一同で普請する事になったが、それを等閑にしている、⑨高札再建の等閑、⑩村持山立木売代金の押領、等である。この騒動は一応名主側の勝利に終るが、訴訟の内容を大きく別ると、名主の押領と、名主の村円支配の動搖に別けられる。名主押領の問題は、天野氏の勝手は早くから困窮し、江戸市谷田町四丁目の岸田屋文右衛門から物成を担保として度々借金して来たが、寛政九年一〇月に支支りを断られ、今までの借金一五五兩三分の内、八〇兩を返済する事で一応内済したのである。しかし天野氏は財政難で支払えず、また村方も困窮村を理由に支払わず、結局、名主の田畑山林を質に入れて六三

両を用意し、残りの一七両を、相談山立木売払代金で支払い、その残りの代金を名主が質入した田畑山林の弁済金にあてたのを私欲押領として訴えられたのである。また祝儀入用金押領は、寛政九年一〇月天野氏の婚礼のため、連光寺村へ一三両、坂浜村へ一七両の臨時御用金を課したのであるが、連光寺村は困窮村ですぐに調達できず、先の金主への返済金より立替えて上納し、後に百姓より取立、領主へ五両、金主へ八両返済したものを押領として訴えられたのである。⁽⁴³⁾ また名主の村落支配を見ると、村役人、特に名主は年貢皆済を完納するため村内支配権を持たせられている。それは基本的には宗門人別帳の作成、五人組帳の作成、五人組帳前書の読み聞かせなどの土地緊縛である。そして、さらに土地緊縛を徹底させるため、村内で村法・郷法や慣習・慣例を定めている。連光寺村でも安永五年に村法を再議定して、公儀御法度の

厳守、五人組の厳守、家業出精、衣類の規制、博奕の禁止などを定め、それに違反した場合は過錢を支払うことを議定している。⁽⁴⁴⁾ しかし、寛政期にはその村法・慣習・慣例もしだいに破られてくる。小前百姓の縁組などの監視は土地緊縛上、村役人の重要な権限であるが、寛政一〇年の訴訟では、名主に無届けで縁組が行なわれ、それを注意した名主が逆に訴えられたのである。そして「村方〆他村江縁組仕候節者、人別相除呉候様届来候処、重立候者共右駄我儘之取計仕候而者、村方取締不宣ニ付」と、名主に無届で縁組が行なわれ、人別帳作成などの村内取締りに支障を来たしているのである。また領主への薪附送りは、今まで高割で附送る事が「旧来之仕来」であったが、村方一同難儀を理由にこれを止

め、今年は江戸で調達する様小前百姓が願ひ出ているのである。しかし、それでは領主も困り、また金子も高くなり、小前百姓の負担も増すので、組頭より差留める様に申聞せて来たが、名主を乗越えて訴え出たものである。⁽⁴⁵⁾

以上の様に、訴訟の四点に限って内容を見たのであるが、寛政期には貧農層の増大により村方が困窮し、年貢皆済・臨時御用金にゆきづまり、領主の勝手向の困窮、そして名主の立替も限界を示し、また小前百姓の縁組届、領主への薪附送りなどの「旧来之仕来」としての慣例もしだいに破られ、村役人对小前百姓の対立が形成され、その様な中で新たに成長した富沢分家等が中心となり村方騒動を起しているのである。その後、天野氏は勝手賄を任用する事で新たな収奪強化を計るが、それによって村役人と小前百姓の対立が明確となるのである。

寛政九年に岸田屋文右衛門よりの仕送りを断れた天野氏は、寛政一一年に富沢分家を勝手賄とする事によって年貢収奪強化を計り、さらに文化八年には、富沢本家より富沢分家に名主役を交代し、富沢分家を勝手賄名主とする事によって、新たな農村支配を行なっている。しかし、文化九年に富沢本家が名主を相手取って先納金割振の不正、無株の件を組頭頭取役として多分の役料を与えている事などを大目附に駈込訴訟を行っている。⁽⁴⁶⁾ しかし、これは敗訴に終るが、文化一三年には、小前百姓より先納金上納拒否の訴えが起され、その調査の過程で名主の先納金算違徴収が判明して、ついに富沢分家は名主退役となる。⁽⁴⁶⁾ その後、富沢本家が再び名主役となるが、文政期になると、知行高八百余石であるにも

かわらず、実収は五百石余であるため臨時金の賦課が増加し、そのため文政二年に知行地四ヶ村の名主より家政縮少の願書が出されている。しかし、名主は領主の財政が大事であるとして、要求を撤回するが、小前百姓の家政縮少・賄金減少要求が続き、領主と小前百姓の対立の中で、ついに文政四年には村役人一同退役願の提出となつてあらわれている。⁴⁶この様に臨時御用金増加をめぐつて小前百姓との対立が激化し、村役人の村落支配は動揺を来たしているのである。

以上の様な年貢・臨時御用金の増加は、小前百姓の年貢皆済の関心を高め、村役人の村内支配はますます困難にし、村請制の動揺となつてあらわれたのである。

そのため、文政改革の触書では、農民に懸る諸費用の軽減を計っている。それは質素儉約、村入用の軽減、浪人・無宿・座頭などの合力銭・諸勸化の禁止、神事・祭礼・風祭など冠婚葬祭費用の軽減、村役人・百姓寄合の費用軽減、関東取締出役・火附盜賊改・道案内人の賄費用の軽減、借金に対する規制、餌差に対する入用の節約、囚人に対する費用の規制など、農民に懸る諸費用の軽減に触れている。また村方騒動・村間出入についても、「村々にて強訴徒党ヶ間敷儀企、又は剣戟を以て⁴⁷乱妨候類は、其村方より早々御出役先へ御訴、領主地頭へも可⁴⁸ニ申立⁴⁹事」と、強訴・徒党に対して村内部・村間で互に監視し、関東取締出役・領主への通告を奨励して未然に防止を計るとともに、「今般組合定の上、組合内に入立候儀は、小組合惣代・大組合惣代取扱成丈内済⁵⁰為⁵¹致、公儀へ御苦勞は勿論支配地頭へも世話不相掛、当人共為⁵²にも

相成、互に堪忍専らにし、扱人は依怙鼻負無之、正路に取扱遣候様申論置候に付⁴⁸」として、山論・水論などの村間出入、村方騒動などについては、小惣代・大惣代が一定の裁判権を持ち内済で解決を計る様触れている。そして大・小惣代で解決を見ない場合は、関東取締出役・幕府の裁決によつたのである。しかし、村方騒動は年貢徴収不正などを中心とする騒動が主であるため、領主権を否定しえなかつた「改革組合村」編成では、騒動を押えるには限界があつたのである。

また、農民を土地に緊縛しておくため、触書で「公儀御法度の敵守」「家業の出精」「博奕の禁止」「風俗退廃の禁止」などに触れ離村者の発生防止を計っている。そして、「百姓風俗を直し、悪敷風俗に不⁵³移様との御仁恵に付、難⁵⁴有仕合可⁵⁵奉⁵⁶承伏⁵⁷良民の弥害に相成候者は不⁵⁸捨置、村役人并小前一同申合稱押へ、其支配領主地頭、又ハ御取締次第御廻村先々へ差出、聊心得違不身持の者共へも厚利害申論本心に立帰、家業出精致し候様、専らに心掛丹精いたし⁴⁹」と悪風俗に成る事を防止し、また農民の害になる者は召捕えて領主・関東取締出役へ差出し心得違の者は百姓としての立帰⁵⁹りを計っている。また遊民・帳外が発生した場合は次のようにある。

一、村々之内心得違にて農業を嫌ひ遊歩行親類組合村役人異見取用ひ不⁶⁰申とて、直に帳外いたさず、組合村役人へ相談異見差加、其上にも不⁶¹取用候はゞ帳外いたし聊の心得違有⁶²之迎後難を恐れ、無宿いたし候者可⁶³便処無⁶⁴之に付、弥増悪事仕成候に付、無宿に不⁶⁵致以前、敵敷教諭可⁶⁶致事、

〔第5表〕天保9年連光寺村農間余業
人数表

業種	役人		百姓
	組頭	百姓代	
古鉄屑買渡世	1		1
居酒渡世	1		
古着渡世		2	1
糸商渡世			1
馬口勞渡世			3
草履草豆			1
木綿糸綿渡世			1
綿打渡世			1
穀物商渡世			1
木挽工職			2
大子類小商			2
菓物小商			1
青			1
合計	2	2	16

(天保9年8月「御改革再調査商人職人取調帳」より、富沢家文書)

これによると、遊民が発生しても直に帳外にしないで組合・村役人より意見を加え、また無宿に成る以前に教諭を加えて、百姓としての成立を計っている。また、婚礼についても紗綾縮緬を禁止し、村役人は絹袖太織布木綿、百姓は布木綿の使用を触れ、儉約を計るとともに、村役人一人立会う事を規定して監視の強化を計っている。

若者仲間・歌舞伎芝居・相撲なども改革で厳しく取締りを行っている。これらは人々を集め博奕などの悪事が行なわれるためである。特に若者仲間は村内での生活組織として存在していたが、幕府には「当郷村々之中若者仲間と唱大勢組合、神事・祭礼等之節人寄ケ間敷儀催し、金銀耕作之暇を費、其外悪事而已企、中ニ者村役人申付相背候者有之」と、人寄ケ間敷事を行ない、悪事を企、村役人に背く様になったためである。また若者仲間は、幕府

が度々禁止していた地芝居の担い手であるため、若者仲間を取締る事によって地芝居を取締ったのである。そして、その取締りは「万一若ものども相催候を厳敷差留候節、村役人を恨候趣に付、以来は組合村々相互に申合せ、他村より差留可申、若相背候はゞ、重立候ものは勿論、同類一同名前書付密々可差出一候事」と、若者仲間を村役人が直接取締るのを避け、小組合・大組合の村々より取締る事を触れている。

以上の様な村内の取締りは本来村役人が行なうのであるが、村役人の権限が弱体化したため、「改革組合村」を編成し、数ヶ村の村役人の上に小惣代を置き、さらに大惣代を置く事によって村役人の監視を深め、取締りの強化を計ったのである。

四 経 済 統 制

「改革組合村」がさらに重要なのは、化政期に展開した江戸地廻り経済を掌握するため、農間余業調査を行っている事である。

農間余業調査は、寛政改革の一環として、寛政六年に鳥見役所によって行なわれているが、その権限を関東取締出役も持ち、文政一〇年から同一二年にかけて調査を行っている。文政の農間余業調査は、「関東筋村々の内農間諸商人多、田畑作余其上奢に長じ、良民の難儀に及び候趣に付」と、農間余業者の増加は、田畑の手余地の増加、農民の奢侈生活となり、そのため以後の農間余業者の発生を防止し、それらを抑えることにあった。

農間余業調査は、商人・職人の軒数、業種開業年代に至る迄

〔第 6 表〕 文政10年 中奈良村業種別人数表

業 種	村 役 人			百姓	他	合 計
	名主	組頭	百姓代			
質 屋	1	2		2		5
小麦賃打菓子烟草	1					1
塩 油	1					1
居 酒 豆腐		1		2		3
小 間 物 類		1		1		2
雜 穀 売 買		1				1
木 挽 買		1		2		3
木 綿 質 打		1				1
紺 搗 屋			1			1
搗 家 米			1			1
桶 根 屋			1	1		2
飴 菓 子			1			1
煎 菓 売				2		2
大 工 人				3		3
紺 屋 職				8		8
烟 草 紙				3		3
烟 草 草				1		1
表 具 履				1		1
針 指				1		1
肴 類 商				1		1
刻 煙 搗 米				1		1
煙 草 搗 草				1		1
水 菓 子 小				1		1
湯 屋 豆 腐				1		1
古 鉄 売 買				1		1
鉾 掛 菓 子				1		1
髮 結				2		2
馬 師				1		1
奉 公 稼					1	1
医 師					1	1
合 計	3	7	4	38	2	54

(文政10年「関東向御取締書上類識定書」より作成)
埼玉県立浦和図書館所蔵 野中家文書

詳細に調べている。文政一二年の日野宿では、家数四一〇軒、人口二九三二人の内、農家三七六軒、農間余業者六四軒で、全体の一五、六%が農間余業を行っている。⁽⁵⁵⁾その内居酒屋渡世一〇軒、湯屋渡世三軒、髪結渡世二軒、煮売渡世九軒である。また、文政一二年の連光寺は、家数八〇軒の内、農家六〇軒、農間余業者二〇軒であり、全体の二五%が農間余業者である。⁽⁵⁶⁾さらに、天保九年には二〇軒と同じであるが、業種は第5表の通りである。その内、組頭二名、百姓代二名、百姓一六名である。また、文政

一〇年の熊谷宿北組合の中奈良村は、村高一九七五石四斗四升で、九給支配の村落である。家数は全体で一四二軒、その内農家は九一軒、農間余業者は五二軒、他に医師・奉公稼が一軒宛で、約三分一が農間余業者である。中奈良村の農間余業者の発生は、宝暦一三年に大工渡世が最初で、次が明和二年に飴菓子渡世である。ついで安永期に三名、天明期に四名、寛政期に九名、文化期に一六名、文政一〇年までに一六名と、化政期に農間余業者が急増している。さらに業種別に見ると、第6表の様になる。⁽⁵⁷⁾この内

最も多いのは大工 八名、次が質屋の五名、居酒屋・豆腐・木挽、紺屋職人がそれぞれ三名、あとは一、二名宛である。農間余業者の内、村役人は一四名、百姓が三八名であり、百姓の業種は大工・紺屋職人・木挽・髪結・飴菓子・煎売などの職人や小商人が多い。村役人は質屋・塩油売買・雑穀売買などのある程度の資本を有するもので、百姓と村役人の業種に違いが見られる。

さらに、文政改革の余業調査は、特に居酒屋・湯屋・髪結床・大小拵研屋を詳細に調べている。これらは「食類を商ひ遊民寄集め、兎角愚敷事を企」と、遊民の集り場、悪事の企場となり、治安上の取締りのためである。文政一〇年から同一二年の余業調査は、農間企業の展開を把握し、以後の新規商人の発生を防ぐためであった。

一、今般新規の商人不相用趣伺之上、村々へ申渡し候ニ付、新規商ひ相始候ものは、村役人より差留、不取用者有之は、其段村役人訴出候節は、右商ひ相始め候もの呼出し、利解申聞為相止、若我意強上申暮不取用筋は書付取之、御奉行所へ可申上候事、

一、宿町々村の内に於て新規に商ひ相始め、同商売相増候ては、古来の商人の害に相成候間、止め呉候様懸合候ても不取用候間、新規の儀に付相止候様利害有之度旨願出候節は取上、商ひ致し候者不_レ宜候ニ付、新規商ひ不_三相成_二旨申渡候、⁽⁵⁹⁾とあるように、古来の商人の害になるため、新規商人を禁止し、農間余業者の増加を防ぎ、村内の発生を村役人が監視して、従来の農間余業者を株として固定化させたのである。そして村役人での

関東における農村構造の変質と文政改革（柳田）

押えきれない場合は大・小惣代に監視させたのである。⁽⁶⁰⁾

一札之事

一、私伴音五郎儀病身ニ付、幼年之嗣商向為寛度存、年季奉公ニ差遣置候処、年明ニ而秋中引取候得共、生得病身ニ而農業而已ニ而ハ日々取統兼（中略）此度作問諸色商ひ渡世仕度奉存候、尤御法度之品売候儀ハ勿論都而正路ニ商ひ仕候様心懸可申候間、此段御聞濟被下、追而御取締様方御廻村御座候節、前書之始未御願立被下候様仕度奉存候、以上、

文政十二年十一月 関戸村

当	人	七右衛門	印
親類惣代	勘左衛門	印	
五人組惣代	孫 七	印	
組 頭	伊右衛門	印	
同	八十郎	印	
名	主 首次郎	印	

御改革

大組合惣代

連光寺村名主忠右衛門殿

小組合惣代

関戸村名主 篤次郎殿

これによると、関戸村の音五郎は病身で農業ができないため、父親をはじめ、親類惣代、五人組惣代、組頭、名主が連印で、大・小惣代に農間余業の許可を願ひ出ている。そして関東取締出役の廻村の時、さらに許可願ひを出すという様に、関東取締出

役、大・小惣代の監視の下に置かれたのである。農間余業調査は新規商人の発生防止にあったが、質屋については新規質屋を認めている。⁽⁶⁾

一、今般質屋ども軒数取調候節取金高書上候は、縦新規に質屋相始度旨願出候者有^レ之節、質屋は在々商人とも違ひ、金銀融通の爲にも相成候に付、所にて故障無^レ之上は、勝手次第爲^レ取計^一（後略）

これによると、質屋の調査も、軒数、開業の年、文政九・一〇年の二ヶ年の質取高、利足まで調べているのであるが、質屋は在々商人とは違い、農民の金銀融通のためになるとして、故障のない場合は新規質屋の発生を認めている。しかし、質屋を行っている者は村役人・上層農民の場合が多く、下層・貧農層の田畑の質流れ、離村者の発生を防止するには限度があつたものと思われる。以上の様に、江戸地廻り経済の展開にもなつて増加した農間余業者を調査し、以後の新規開業の発生を防止し、村民を百姓として緊縛するため、その監視を関東取締出役、大・小惣代が行つたのである。

おわりに

以上、日野宿組合を中心とした、文政改革について記してみた。これを要約すると、宝暦・明和頃よりの農民層分解にもなつて農村構造に変質を来たし、無宿・博徒が多数徘徊して農村に寄生しているのである。これに対し、文政一〇年以前には、組合村を編成して自衛を計つたのであるが、文政一〇年には「改革組

合村」を編成して、関東取締出役の指示の下に取締りにあたつたのである。しかし、「改革組合村」は単に逮捕するだけでなく、寄場役人、大・小惣代が教諭を加えて改心帰農を計る事を第一の目的としたのである。またそれに懸る諸費用を「改革組合村」の高割で負担して、村で懸る費用の軽減を計る事にあつたが、天保四年の囲補理場設置によって費用の増加を招き、囚人を取逃す事が度々起り、逆つて不取締りとしたのである。

また村内では、村支配のため村法・郷法・慣習・慣例が定めているが、寛政一〇年の村方騒動では、それらが破られ村役人の権限は著しく弱まり、化政期には領主勝手賄・勝手賄名主の設置によつて年貢取奪強化が行なわれ、小前百姓の年貢に対する関心を高め、村役人と小前百姓の対立が深まり、ついに文政四年には村役人の退役願の提出という村請制支配の動揺が見られるのである。そのため、文政改革の触書で、公儀御法度の厳守、家業の出勤を始め、農民に懸る諸費用の軽減を計り、年貢皆済を円滑にして村方騒動の回避を計つたのである。また騒動に対しては、村間で互に監視させるとともに、大・小惣代に一定の裁判権を持たせ内済を奨励したのである。さらに帳外・遊民に対しては、大・小惣代が教諭を加えて改心帰農を計り、若者組には他村よりの取締りを行つていたのである。しかし「改革組合村」の編成は、領主権を否定する程のもでなかつたため、以後の年貢徴収・割振をめぐつて起こる村方騒動を押さえるには限界があつたのである。

また、地廻り経済の展開にもなつて化政期に急増した農間渡世を調査し、それらを株として固定し、農間余業の増加を大・小

惣代に監視させ、さらに関東取締出役の許可を必要として、以後の発生の取締りを行ったのである。

以上の様な取締りは、本来、名主・村役人が行って来たのであるが、寛政→化政期の村請制支配の動揺により、名主の権限低下を招き、取締りが弱まったため、文政改革では「改革組合村」を編成し、数ヶ村を集めて小惣代を選出して名主を統轄し、さらに数名の大惣代を選出して、小惣代・名主の統轄を行ない、勘定奉行・関東取締出役の下に置く事により名主の権限を強め、村請制支配の再編成を行ったのである。

註

- (1) 森安彦氏「幕末期の幕政」『『幕末郷土史研究法』所収〕一八七頁。
- (2) 註1の他に、「関東における農村構造の変質と支配機構の改革」——関東取締出役設置の歴史的意義——(『史潮』七四号)、「幕藩制社会の動揺と農村支配の変貌——関東における化政期の取締改革を中心に——」(東京教育大学昭和史会編『日本歴史論究』所収)。
- (3) 大石慎三郎氏「武蔵国組合村構成について」(『学習院大学経済論集』四ノ一)、「近世村落の構造と家制度」増補版)所収。
- (4) 北島正元氏「化政期の政治と民衆」(『岩波講座日本歴史』近世4所収)、「文政改革」(『体系日本史叢書』政治史Ⅱ)所収。
- (5) 川村俊氏「近世における組合村の存在とその性格」(『史学雑誌』七三ノ一一)、「上総国における改革組合村の始源」(『日本歴史』二三八号)、「横芝地方における旗本領
- (6) の動向——特に改革組合村編成以前の動向と村方の対応について」(『横芝町史』——特別寄稿篇——)所収。
- (7) 煎本増夫氏「江戸幕府の関東支配と佐倉藩——在地支配の問題を中心に——」(『譜代藩政の展開と明治維新』)所収。
- (8) 長谷川伸三氏「文化・文政期増上寺領の村方騒動と改革の展開」(『日本史研究』一一二号)。
- (9) 山中清孝氏「幕藩制崩壊期における武州世直し一揆の歴史的意義」(『歴史学研究会七四年度大会特集別冊』)所収、「関東取締出役と相武の改革組合村々」(『郷土神奈川』六号)、「武州・相州「改革組合村」編成について」(『神奈川県史研究』二七号)。
- (10) 文政一〇年「御取締御改革用留」国立史料館所蔵 富沢家文書 以下、富沢家文書・富沢分家文書とあるのは国立史料館所蔵である。
- (11) 「貞享元年日野宿御伝馬証文写」富沢家文書。
- (12) 文政七年九月「議定連判帳」富沢家文書。
- (13) 文政一〇年正月「御料私領御用留」日野市南平 平穰家文書。
- (14) 註9
- (15) 「神奈川県武蔵国第三十二区之記」富沢家文書。
- (16) 「地方落穂集追加」(『日本経済叢書』巻九)四九五頁。
- (17) 註1
- (18) 山中清孝氏「幕藩制崩壊期における武州世直し一揆の歴史的意義」(『歴史学研究会七四年度大会特集別冊』)所収。

註15 四七七頁。

- (19) 文政一二年「御取締御改革組合村御支配御姓名帳」富沢家文書。
- (20) 註1、註15 四六〇頁など参照。
- (21) 註9
- (22) 註5
- (23) 『御触書天明集成』九二二頁。
- (24) 文政四年「浪人鉢之者止宿断リ方合力ニ付廿一ヶ村議定一札」富沢家文書。
- (25) 『町田市史料集』第五集 一九八頁。
- (26) 文化一一年「組合取究議定帳」埼玉県立浦和図書館所蔵野中家文書。
- (27) 天明三年「組合村々相談定書」山梨県立図書館所蔵 甲州文庫。
- (28) 鈴木寿氏『近世知行制の研究』五二―五七頁 一二〇頁。
- (29) 註15 五六一頁。
- (30) 註15 四八九頁。
- (31) 註15 四六七頁。
- (32) 弘化二年「為取替議定書之事」埼玉県立浦和図書館所蔵野中家文書。
- (33) 埼玉県立浦和図書館所蔵 野中家文書。
- (34) 国立史料館所蔵 富沢家文書。
- (35) 『武州多摩郡連光寺村富沢家文書目録』解題。
- (36) 註34
- (37) 註34
- (38) 天明五年「田畑屋敷山井新田林共改覚帳」富沢分家文書。
- (39) 註34
- (40) 天保九年「御改革再調家数商人職人取調帳」富沢家文書。
- (41) 明治三年「武蔵国多摩郡連光寺村民戸籍」富沢家文書。
- (42) 寛政一〇年「百姓七拾人惣代惣左衛門等名主富次郎等相手取私欲押領相掠候出入一条之由訴状」富沢分家文書。
- (43) 寛政一〇年「名主富次郎出入一件」富沢家文書。
- (44) 安永五年「村法定連判帳」富沢分家文書。
- (45) 文化九年「名主奥右衛門不法ニ付元名主権平訴状」富沢家文書。
- (46) 仙石鶴義氏「近世後期旗本家政改革と御勝手向賄名主役の任用をめぐって―特に旗本天野氏と武州多摩郡連光寺村富沢分家の關係を中心に―」(『法政史学』第二五号)。
- (47) 註15 四六四頁。
- (48) 註15 四八五頁。
- (49) 註15 四六〇頁。
- (50) 註15 四六八頁。
- (51) 文政一二年「御改革若者継請印帳」日野市南平 平穰家文書。
- (52) 多仁照廣氏「地芝居と若者仲間―文政取締改革と『かくれ芝居』―」(『地方史研究』一三一号)。
- (53) 註15 四六四頁。
- (54) 註15 四八一頁。
- (55) 文政一二年「家数人別商ひ并諸職人書上帳扣」日野市日野 佐藤利文家文書。
- (56) 文政一二年「家数并農間渡世書上」富沢家文書。
- (57) 文政一〇年「関東向御取締書上類議定書」埼玉県立浦和

図書館所蔵 野中家文書。

(58) 註 56

(59) 註 15 四八三頁。

(60) 文政一二年「作間渡世願」富沢家文書。

(61) 註 15 四八五頁。

〔追記〕 本稿は大学院修士論文の一部をまとめたものである。
成稿に当っては指導教授である村上直先生を始め、多くの方にお
世話になった事を感謝する次第である。